



LTD（話し合い学習法）を用いて 総合知を測る入試－PASCAL 入試－

創価大学 アドミッションズセンター長 中山 雅 司



はじめに

創価大学は 2018 年度から総合型選抜「PASCAL（パスカル）入試」を実施している。本入試は、新しい AO 入試として導入したものであるが、LTD（Learning Through Discussion の略）というアクティブラーニング（Active Learning、能動的学習）のひとつである「話し合い学習法」を入試に取り入れたユニークな入試として注目され、延べ 704 大学・短期大学のなかから文部科学省による「令和 4 年度大学入学者選抜における好事例集」の 17 件のひとつにも選定していただいた。

本入試を導入した背景には、少子化による志願者減少という社会環境の変化のなかで、いかにして志願者を増やし受験生を確保するかという、どの大学にとっても避けられない命題があり、そのなかで生み出した新たな方策であったことは確かである。しかし、それ以上に、本学の理念にかなう学習方法を入試に取り入れることで受験生の能力を総合的に測り、入学後の学びにスムーズにつなげるとともに、本学の目指す有為な人材を社会に送り出すことに本入試の意義があると考えている。

本稿では、本学が同入試を導入するに至った経緯と経過をふまえ、PASCAL 入試の概要やその後の展開、入学生の状況、今後の課題について紹介したい。

1. 創価大学の教育理念とアクティブラーニング

(1) アクティブラーニング導入の背景

PASCAL 入試について述べるにあたって、最初に導入の背景にあった高等教育および入試制度をめぐる社会的変化と議論をふまえ、本学がなぜアクティブラーニング（以下、AL）を重視し、大学における学習方法として取り入れることになったのかについて述べておきたい。なぜならば PASCAL 入試では、LTD という AL の方法のひとつを用いているからである。

文部科学省の諮問機関である中央教育審議会高大接続特別部会は、平成 26 年（2014 年）12

月に答申を出し、高校教育、大学教育、高大接続の三位一体改革という文脈のなかで、大学入試センター試験を廃止して大学入学共通テストを創設する方針を示した。その理由は、センター試験では、与えられた問いに対して習得した知識や技能を手がかりに、正解を速く・正確に導く力に重きが置かれていた点にあった。つまり、従来の大学入試が知識偏重型であったために、高校教育もまたその準備としての知識詰め込みにならざるを得ず、健全な「生きる力」の涵養を阻害してきたのではないかと、との問題意識から議論された末の改革案であった。さらには、そもそも大学教育全体が知識の伝授に偏り、学生の「生きる力」を育ててこなかったのではないかと自己批判もあった。

学校教育法 30 条 2 項は「生きる力」を涵養する教育の目的としての学力の 3 要素として、①「知識・技能」、②「思考力・判断力・表現力」、③「主体性・多様性・協働性」を総合的に育むことを謳っている。しかし、これまでの大学入試とそれに臨むための高校教育、さらには大学教育すらも知識偏重になっていたとすれば、総合的学力を涵養するための教育・学習方法が求められることになる。AL はそのための学習者参加型の授業や協同学習などを総称した言葉であり方法である。そして、話し合い学習法と呼ばれる LTD は、予習教材に対し十分な予習・読解作業を行った後、それらを持ち寄ってディスカッションを行い、協同的に学習を深めていく方法のことである。

(2) 建学の理念と LTD

本学は、教育力の強化・向上の一環で、この LTD を含め AL を 2000 年以来全学的に取り入れて積極的に推進し、定期的な FD 活動によって進化させてきた。2000 年というのは、本学が教育・学習活動支援センター（CETL）を設立し、FD 活動の一環として授業へのアクティブラーニングの導入やそのための教員研修を開始した年にあたる。そして、その取り組みが評価され、2003 年に文部科学省の GP（Good Practice）事業に採択された。それが追い風となって、一層全学的に AL 推進に取り組み、2014 年度大学教育再生加速プログラム（AP）にも複合型（AL、学修成果の可視化）で採択された。では、創価大学はなぜ AL に力を入れてきたのか。その理由は、建学の理念にある。

創価大学は、1971 年、創立者池田大作先生によって創立された。キャンパスは東京都八王子市にあり、8 学部 10 学科、6 つの研究科、2 つの専門職大学院を擁する総合大学で、日本全国・世界各国から集う約 6500 名の学生が緑豊かなキャンパスで学んでいる。開学にあたって創立者は建学の精神として、「人間教育の最高学府たれ」、「新しき大文化建設の揺籃たれ」、「人類の平和を守るフォートレ



ス（要塞）たれ」の3つを示した。この建学の精神の実現に向け、教職学が一体となって大学建設に取り組んできた。そして、2021年に創立50周年を迎えるにあたり、新たな10か年の中長期計画として策定された「Soka University Grand Design 2021-2030」では、「価値創造を実践する『世界市民』を育む大学」とのテーマを掲げ、「教育」「研究」「SDGs」「ダイバーシティ」「経営基盤の構築」の5つの分野で取り組みを進めている。

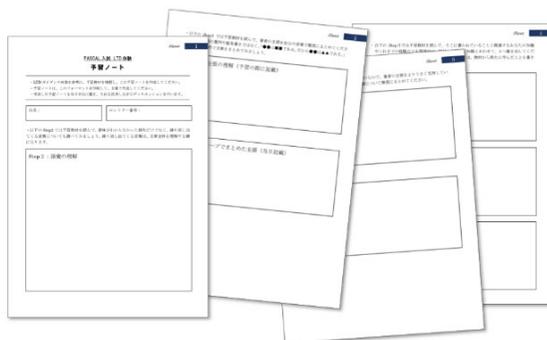
創価大学は、地域社会や地球社会の課題と真摯に向き合い、人々の幸福と世界の平和の実現に貢献する「創造的人間」、すなわち、価値創造を実践する「世界市民」の育成を目指し、そのために、たしかな「知力」を基盤とし、不確かな未来を切り開く「創造性」を発揮する力、協働する人々の価値観や理念など「多様性」を受容（寛容）する力を育む教育に取り組んでいる。すなわち、「創造的人間」、「世界市民」の育成、輩出を目指しどこまでも学生第一主義で人間教育に力を注いできた。学生第一主義とは、学習者である学生を第一に考えるということであり、ALはまさに学習者を中心にした教育方法であり、本学の理念に合致した教育方法であるといえる。LTDというALの手法を入試に取り入れて知力と人間力という総合知を備えた受験生を広く募って能力と適性を測り、入学後の学びにもつなげていきたいと考えたのは自然な流れであった。

2. PASCAL 入試の導入と変化への対応

(1) LTD 方式の概要

まず PASCAL 入試の名称について説明しておきたい。パスカルとは、17世紀フランスの物理学者・思想家であるブレイズ・パスカル (Blaise PASCAL, 1623- 1662) の名であり、創造的知性を象徴する意味でつけた名称でもあるが、同時に、“Performance Assessment of Students' Competency for Active Learning”を略したもので、ALを行うための学生のコンピテンシー（能力）を（ペーパーテストではなく）パフォーマンスによって評価する試験ということである。この PASCAL 入試を本学は 2018 年度入試から実施することにした。具体的には、応募要件を学習成績の状況（評定平均値）3.5 としたうえで、①調査書、②自己推薦書、③出願要件・資格等を証明する書類で審査する1次選考と2次選考で合否が決まる。

1次選考に合格した学生が2次選考に進むことになるが、2次選考は、予習教材をもとに事前に予習ノートを



▲ 学習ノート

作成したうえで、当日、4～6人のグループ単位でLTDというグループディスカッションが行われる。それと、個別の面接を合わせて総合評価が行われる（2020年度入試までは小論文も課していた）。

対象学部は、理工学部を除く全学部でスタートし、のちに2023年度入試から理工学部がプレゼンテーション方式を導入、2025年度入試からは理工学部もLTD方式にも参入することになった。その結果、定員は当初、100名（全学の募集定員の7%程度）でスタートしたが、年内入試での獲得を重視してその後、約170名に拡大、2025年度入試では約230名（定員の15%）にまで拡大することになった。

LTD方式 (全学部)

選考
方法

2025年度入試より
理工学部も出願可能に！

- 第一次選考 <書類審査> 学部ごとの観点に基づき下記書類の審査を実施



調査書



自己推薦書



出願要件・資格等証明書類

※学部ごとの観点についてはホームページで詳細をご確認ください。



- 第一次選考合格後 <予習実施> 第一次合格者は第二次選考に向け下記の予習を実施



予習教材*1
の精読

*1 4,000～6,000字程度



予習用
ガイダンス
映像の視聴



「予習ノート」*2
の作成

*2 大学独自様式

- 第二次選考 オンライン会議システム「Zoom」を利用した選考



LTD方式のグループワーク*
(約60分)

*1 グループ4～6名で実施。



面接試験(個別/約15分)
※面接員2名、受験者1名

LTD方式
紹介動画は
こちらから



先に述べたように、文科省は学力の3要素について、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度と示している。PASCAL入試では、「知識・技能」をおもに1次選考で見たうえで、LTDでは②③を合わせて測ることにより、多様な学生を集めたいと考えている。LTDは6つのステップに沿って約60分をかけて行われ、2名の教員がファシリテーター（進行役）とタイムキーパーを務めながらループリックにもとづいて評価を行う。

LTDセッションの流れ

- ◆作業準備(10分)
グループ確認・諸注意など
- ◆LTDセッション(計50分)
 - ステップ1 ウォーミングアップ(7分)
 - ステップ2 語彙の理解(5分)
 - ステップ3 主張の理解(8分)
 - ステップ4 話題の理解(8分)
 - ステップ5 知識・自己との関連づけ(16分)
 - ステップ6 学びの共有(6分)

とくに LTD では、議論を得意とする受験生も多く挑戦する。しかし、いわゆる『仕切り屋タイプ』を求めているのではなく、むしろチームとして他者と協働・協力して意見を述べ、議論を作っていく人を求めている。したがって、グループでうまくディスカッションに乗れない人がいた場合、上手に話を振ってあげるなどの心遣いができることも評価の対象になる。評価は相対評価ではなく絶対評価なので、グループ全体としてよいディスカッションになれば全員が合格となる可能性もある。しかし、受験生も評価する教員の側も慣れない入試で要領がなかなかつかめないとの不安も予想されたことから、LTD セッションの解説動画を作成したり、当初は、夏休みを中心に体験会をオープンキャンパスの機会に実施するとともに、教員にも FD 研修を行ったり、体験会で模擬評価の機会をもってもらうなど丁寧に進めた。

(2) コロナ禍でのオンライン実施の試み

そのようななか、社会はもとより大学にとっても重大で困難な出来事が発生した。いわゆるコロナ禍である。2020 年年頭から感染は世界的にも急速に拡大し、大学も構内への立ち入りを禁止し、授業もすべてオンラインにするなどの対応を余儀なくされた。

2020 年の秋から出願が始まる 2021 年度入試をどうするかが大きな問題となった。授業すら対面で行えない状況のなかで、そもそも入試自体が実施できるのかが危ぶまれた。10 月に実施する PASCAL 入試も従来対面で行っていたが、少なくとも対面での実施は無理であろうということが予想された。そのようななか、科目試験のない PASCAL 入試の強みを活かして LTD と面接ならオンラインでも行えるのではないかということになり、急遽、オンライン実施に切り替えて準備を進めた。小論文については、やはりオンラインでは不正行為を完全には防止できず入試の厳格性と公平性の保証ができないことから、課さないことにした。

しかし、大学としても入試をオンラインで行うことなどは想定したこともなく、経験も当然ないことから、アドミッションズセンターを中心に対策チームを作り、起こりうる事態を想定しながら準備を行った。とくに心配されたのが通信環境確保の問題であった。受験生は自宅な

どからオンラインで受験することから、通信環境も様々で試験の途中で通信が途切れてしまうこともありうる。その場合に、どのように対応するかなども含めてマニュアルを作り、受験生全員への通信環境テストも事前に行うなど、不安を可能な限り取り除きながら準備を行った。その結果、当日は大きなトラブルもなく、無事に終えることができた。

反対にオンラインにしたことでメリットもあった。たとえば、従来、受験にあたって受験生は大学のキャンパスまで来なければならなかったが、オンラインにしたことで全国どこからでも受けられるようになったことである。とくに全国から学生が集う全国型の本学にとって、コロナ禍による影響は大きなものがあったが、オンラインという IT 技術がそれを救ったともいえる。その結果、大学にとってもコロナ禍にもかかわらず志願者の減少を抑えることに寄与する方法となったともいえる。なかには、海外から受験した受験生もいた。また、LTD は 4~6 名のグループでディスカッションを行うが、それまでは評価者の教員は背後から発言の様子を見ながら採点を行っていた。それがオンラインになったことで一人ひとりの表情や仕草などがよく見えるようになった。その意味で、怪我の功名ではないが、結果的にオンラインにしたことがかえってよい結果をもたらすことになった。オンライン方式はコロナ禍が明けた現在も続けている。

3. PASCAL 入試の発展と成果

(1) チャレンジプログラムの実施

以上のような対応によって 2021 年度入試は何とか乗り切ったが、コロナ禍前から続いていた志願者の減少という状況は変わらず、コロナ禍はそれに追い打ちをかけることになった。そのようななか、志願者の回復に向けてさらにどのような手を打つことができるのか。議論と検討を重ねた結果生まれたのが 2022 年度入試から導入した「PASCAL 入試チャレンジプログラム」である。これは高 3 生を対象にし、PASCAL 入試で評価される学力の育成を目指して開かれるオンライン講座である。入試本番と同じようにグループワークを行う「LTD 体験」と、高校生の能力や経験を振り返って大学で学ぶ意味や志望学部等について考えを深める「キャリアプランニング」への参加の 2 本立てとなっている。大学入学のためのスキルとマインドを鍛えるプログラムともいえる。

それに加えて、オープンキャンパスにも 1 回は参加してもらおう。このプログラムは、高 2 の終わりの 1 月に募集を始め、3 月から 8 月にかけてオンラインで行う無料のプログラムで、募集人数は 200 名としている。そして、PASCAL 入試では出願要件として評定平均値 3.5 以上を求めているが (2025 年度から 3.2 以上)、このチャレンジプログラムを修了した場合には修了証も発行し、出願時に評定平均の条件が 3.0 以上に緩和されることになる。



狙いとしては、本学への志願度が高いのに評定平均が基準に満たないために受験できない高校生にも機会を広げたいということがあった。しかし、より大事なことは、チャレンジプログラムを通じて受験生を育てていくという高大接続の育成型プログラムであるという点である。すなわち、このプログラムを通じて受験生には本学の理念への理解をより深め、入学後の学びや将来についてもイメージを描いてもらうことで、高校から大学へのスムーズな移行を可能にするとともに、本学の理念や教育方法にマッチした受験生を育てることができるということである。

それに大きくかかわってくれているのが、受験生にとっては入学後の先輩にあたる本学現役の学部生である。このプログラムの設計にあたり手伝ってもらった学生を募集したところ、ボランティアで多くの学生が集まってくれた。

PASTA (PASCAL と STAFF を合わせたネーミング) と名づけられたこのサポートスタッフのメンバーに LTD 体験会でのファシリテーターを務めてもらうとともに、「キャリアプランニング」で行われるグループ面談も担当してもらう。そのために、本学の専門の教員の協力も得て、コーチング研修もしっかりサポートスタッフに行ったうえで担当してもらっている。また、受験につながるプログラムという性格上、公正を期すためにサポートスタッフは受験生と個人的なつながりはもたないように徹底もしている。

さらに、プログラム参加者への連絡やプログラムのアレンジといった事務作業では大学院生のスタッフも関わってくれている。受験生にとっても現役の学生や他の受験生と触れ合うことでモチベーションが高まるとともに、他者に貢献したいとの思いを強くもつ本学の学生にとってもやりがいを感じられるという点にこのプログラムの真価があるように思う。

また、LTD 体験会では教員も最後にフィードバックコメントをするなど協力してもらうが、それが同時に教員研修の役割も担う形となっており、まさに教職学一体で取り組むプログラムであるとも言えるかもしれない。

(2) 入学生の成長実感

このような手厚いサポートに支えられたプログラムによって、PASCAL 入試から本学の理念にかなった意欲と能力の高い学生が入学してくれているように思われる。その成果を測るために、本学の IR 室が中心となって PASCAL 入試で入学した学生の入学後の学びや成長について追跡調査を行っている。そこから PASCAL 入学生の高い成長実感が見えてくる。

2021 年度のデータによれば、①異文化の理解能力における成長実感の全学生平均は 82% であるのに対して、PASCAL 入学生は 87%、②日本語コミュニケーション能力において、全学生平均は 71% であるのに対して、PASCAL 入学生は 90%、③他者と協力して行動する力において、全学生平均は 82% であるのに対して、PASCAL 入学生は 86%、④リーダーシップ能力において、全学生平均は 69% であるのに対して、PASCAL 入学生は 89% となっている。私も教員という立場で日常的に学生に接し、ゼミなどの授業でも LTD をよく用いるが、PASCAL 入学生は積極的に発言するなど、グループのまとめ役や牽引役を担ってくれている学生が多いような実感ももっている。



また、チャレンジプログラムを経て入学した学生（2023 年度入学生）へのアンケート調査では、「プログラムでの学び、体験が入学後活かされた」という回答が、実に 95% に至っている。以下は、チャレンジプログラム体験者の代表的な感想である。

「自分の経験と結びつけることで自身がどう思ったのかを文章で表せるようになった。」
 「相手に伝えるときはどうしたら伝わりやすいかを考えるようになった。」
 「最初に他人の意見を否定しなくなった。」
 「知らない人と話す時に緊張しなくなり、自分の意見を明確に出せるようになった。」
 「大学のことや自分自身のことについて深く知るいい機会になった。」
 「相手の意見から新たな学びが生まれるなど考え方が変化した。」
 「積極的に発言できたり、話し合いを円滑に進めることができるようになった。」
 「自身の主張をする際に、他の人の意見や物事の本質を捉えようとする力がついた。」
 「思いつかない考え方や価値観に出会えた。客観的に物事を見られるようになり、すぐく人間的成長を感じた。」
 「自己分析をしやすく、改めて自分の強みを知れ。先輩のおかげで自信がついた。」
 「先輩方と直接話しながら、時間軸からキャリアデザインを考えることや自分の得意な事、大学入学後にしたいことなどを考え、自分についての理解を深めることができた。」
 「自己分析講座において、自分の今の立ち位置であったり、伸ばすべき能力を認識できたところが魅力的だった。」

おわりに

ここまで、本学が総合型選抜 PASCAL 入試という新たな入試を導入した経緯、入試の概要、コロナ禍でのオンライン実施への挑戦、育成型入試としてのチャレンジプログラムの導入、入学生のその後の成長実感について述べてきた。今日、わが国では少子化が進むなかでいかに学生を確保するかという難しい課題に応えるためにも、大学教育における学びの質をいかに高め魅力あるものとするか、そして、私学にとっては建学の理念のもとで学生をいかに育て、社会に送り出していくかということがあらためて問われている。本学の PASCAL 入試も「生きる力」を涵養する教育の目的としての「学力の 3 要素」にかなう学生をいかに選び育てていくかという要請のなかで試行錯誤の末に生み出したものである。そして、ここまでのところは概ね成功していると言えるかもしれない。

しかし、課題がまったくないわけではない。本稿でも紹介したように、本入試は大変に手間暇がかかる入試で、教職員にとっても負担の大きい入試でもあるということである。その分、本学の理念に賛同する意欲の高い学生をしっかりと確保できているともいえるが、入試はもちろん PASCAL 入試だけではないこともふまえ、全体のなかでバランスをうまくとりながら持続可能なものとしていくことが必要であると考えている。

実際に PASCAL 入試をスタートして以降も総合型選抜として 2024 年度入試では「小論文入試」を新設し、2025 年度入試では「グローバル人材育成入試」や「国際バカロレア入試」も始めることになった。また、高校での探究授業をサポートする「そうか！」という名前の本学独自の高大連携プロジェクトも行っている。アドミッションズセンターとしての業務も多岐にわたり増えているが、「学生中心の大学」を掲げる本学として「価値創造を实践する『世界市民』を育む大学」を目指して一層邁進していきたいと考えている。

【参考文献】

- ・ 関田 一彦「LTD と大学入試：創価大学 PASCAL 入試の取り組み」『協同と教育』（日本協同教育学会）第 14 号（2018）
- ・ 山岡 政紀「新 AO『PASCAL 入試』が目指すもの」（SEED＜創価大学学士課程教育機構ニュースレター＞）第 12 号（2016）
- ・ 山岡 政紀「アクティブラーニングに必要な行動特性を見極める PASCAL 入試／創価大学」（リクルート進学総研 2017.7.10 付記事）